（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

## 新たな外国語

意味も分からない外国語の文章を丸暗記する苦労もあったが、それが礼拝の手伝いをさせてもらう条件であったので、その是非は追求せずに素直に覚えた。しかし、外国語のフレーズを覚えることで、得をすることもある。そのことを知ったのは、小学校低学年の時だった。祖父の町で従兄弟たちと共に市営プールに行ったことがそのきっかけとなった。

南山大学学長　ミカエル・カルマノ

6

## 兵隊を相手に戦略的な活動

ギムナジウムの教室で。４列目の左から２人目が筆者（59年）

その町には米軍基地があり、兵隊もよく同じプールに泳ぎに来た。1950年代の後半で、ソフトドリンクはペットボトルではなく、ガラスの瓶に入っていて、値段には必ず瓶代も含まれていた。飲み干して、買ったところに返したら、瓶代のお金が戻ってくる仕組みである（今はドイツもほとんどペットボトルとなっているが、スーパーでケース買いする時は、昔と同様、空になった1ケースを返せば瓶代は取られない）。さて、当のアメリカの兵隊たちは瓶を返すことを煩わしく思っていたか、帰るときによくボトルをそのまま置いていってしまっていた。

彼らが帰ってからそのボトルを拾うことも一つのやり方であろうが、ちょっとした実用英語を生かして、もっと戦略的に動いた方が、実は儲かるのである。そのために使ったのは、"May I have your bottle, please"という短いフレーズであった。「にこにこしながらこう言うと、ボトルをもらえるチャンスがあるよ」と言われて、私はまたも丸暗記した良く分からない外国語を使って新しい活動に望んだ。実績はどのぐらいになったのか覚えていないが、教会用のラテン語の次に習得した外国語はこのボトル取得用の英語であった。

今と違って、西ドイツ（少なくても私が生まれ育ったヘッセン州）の小学校教育課程には外国語の科目はなかった。（基本的に今日まで続いている）ドイツの伝統的な、いわゆる複線型の学校教育制度において外国語教育は5年生から始まる。つまり、外国語が必修科目となるのは、2つ目の学校に進学してからなのである。私はその時初めて自分の将来の進路について意思を表明した。進学先の学校（「ギムナジウム」）には英語で始まるコースもあったが、「神父になりたいから、ラテン語が必修科目となっている学校に行きたい」と両親に告げたのである。日本語という選択肢は、当時はなかったが、あったとしても私はきっとラテン語を選んだに違いない。